

世に棲む日日 二

司馬遼太郎

世に棲む日日 二

司馬遼太郎

文藝春秋刊



世に棲む日日二

昭和四十六年六月十五日 第一刷
昭和四十六年八月二十日 第四刷

定価 五六〇円

著者 司馬遼太郎し ば りょう た ろ う

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

郵便番号一〇二

印刷 凸版印刷
製本 大冢製本

万一落し乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Ryōtarō Shiba
0093—360850—7384

Printed in Japan

目次

奇士 5

村塾の人々 17

空の青 28

評定所 39

二十七日、晴 50

お雅 61

雪の夜 72

航海 84

信州松代 94

福と狂 106

毛利敬親 118

長井雅楽 129

暗殺 140

長州人 151

上海にて 163

戦争と革命 175

井上聞多 186

焼打ち 197

御成橋事件 207

狂生 218

饅頭笠 229

砲声 240

出発 252

馬関へ 263

暴発 275

幽魂 287

大潰乱 298

灰燼 310

転換へ 321

暗殺剣 332

砲火 343

壇ノ浦 354

装帧

三井永一

世に棲む日日二

奇 士

高杉晋作は、いま十八歳である。このあと十年の身動きが、かれの存在を歴史にきざみつけた。この若者は、若者のまま、二十八歳で死ぬ。対幕戦陣中で風邪をひき、それが持病の肺結核をひき起したことによるが、かれの病床は看病人や見舞客でにぎやかであった。いよいよ死期がせまったときかれの脳裏にこしかたのことどもがあふれ、筆と紙を所望した。そばにいた野村望東尼という、晋作をひどくかわいがっていた福岡の女流勤王歌人が、筆に墨をふくませ、晋作にあたえたと、晋作は仰臥したままくるしげに辞世の歌をかいいた。

「おもしろきこともなき世をおもしろく」

士 上の句ができたが、下の句は息がきれてつづかない。しかし下の句など晋作の生涯にとって不要にちがいない。かれの情念も生活もこの上の句のなかに尽くされており、たとえどのように巧みな下の句をつけても蛇足になるに相違なかった。が、歌人の野村望東尼は晋作の寿命がすでに尽きようとしているのを見、いまいそぎ下の句をつけてやらないとせっかくの辞世が尻切れとんぼになることをお

それ、

「すみなすものは心なりけり」

と、つけた。おもしろくもない世の中をおもしろく棲み暮らしゆくのは心である、というのである。説教くさく道歌じみていて、上の句の迫力が下で急にしぼんだような感じだが、歌としてまとまることはまとまった。しかし晋作はそれで満足したらしく、

「……おもしろいのう」

と言つて目をつぶり、ほどなく息をひきとった。

繰りかえしているようだが、晋作はいま十八歳である。

一つ歳下の久坂玄瑞とともに、いま松本村への道にあるいている。この明倫館の秀才は、すでに学問は明倫館で十分だとおもっているはずであり、松陰によっていま一つあたらしい学問を学ぼうとしているわけではない。かれの松陰へのこのときの期待は、学者としての松陰についてではなく、

——なにやらおもしろそうな男。

という、とりとめもない気持であつた。このとりとめなきが、この年齢の、物事に能動的な性格をもった若者の気持を身もだえするほどにやるせなくするものらしい。なにごとか身を焼くほどのおもしろさの方向はないかともとめており、それが、松陰に会うことによつてわかるにちがいないという期待であつた。たとえ松陰がおしえてくれなくても、松陰が手もとにもっているかれの手製の新聞

飛耳張目録

——がそれをおしえてくれるにちがいない。

「飛耳張目録」

というのは、松陰が見聞した内外のニュースを、かれ自身がかきとめて一冊の帳面として綴じ、村塾に置いてある。筆まめな松陰は見聞がふえるにつれて書き足してゆくのだが、松陰の書いたもので、このニュース帳ほど門生たちのあいだであらそって読まれたものはなかった。

——日本と世界はどうなっているか、ということとは、松本村の村塾にゆけばわかる。

という評判すらあり、遠く安芸（広島県）あたりからこれを見にくる人まであるという。

晋作は、松陰にも会いたい、それもみたい。というより、晋作の印象ではこの海の底のようにしずかな秋の町で、川むこうの松本村の一角だけが、日本や世界の像をあきらかにする照明の光源のようにおもわれた。

「ここだ」

と、久坂が立ちどまったあたりは、まったく草深い。ほそい野道のかたわらに、粗末な門が立っている。杉家である。

門には門扉^{もんび}などはなく、敷地のなかの様子が、門をとおしてよくみえる。

門を入ると、少女が母屋^{おもや}の障子をあけて出てきた。いかにも女童^{めわらこ}といった風体^{ふうてい}で、着物のすそをみじかく着、なにやらかごをかかえている。高杉は最初、

（このあたりの百姓の娘か）

とおもったが、久坂の様子がにわかにかわったので、見当がはずれた。

久坂は、色が白い。その首すじまで赧^{かか}くして、ていねいに一礼した。

少女は色が黒く、つり目で、お世辞にも美しい娘とはいえなかったが、首がほそく小柄で、身ごな

しが軽やかであった。彼女も久坂をみてどぎまぎしたらしく、肩をすぼめ、お辞儀をしようとした。しかし蔓で編んだかごがぶれそうになるほど抱きしめただけで、うまくお辞儀にならない。その様子に娘らしいいういしきがあり、よくみると肩あげがとれていて、だから齢は十四、五歳になっているか、それを過ぎているのであろう。

「畑ですか」

と、久坂がいった。

「はい。このようななりで」

もう娘は落ちつきをとりもどし、久坂をじっと見つめている。娘のいうなりとは、畑仕事のときの労働着ということらしい。しかしそれを恥じるというのは、おかしい。

（こいつは、なにかいわくがある）

と、早熟な晋作はにらんだ。

娘が行ってしまったあと、高杉は、おい、と久坂にいった。

「なんだえ、あの娘」

わざと、品わるくいった。

「ことばをつつしんでもらいたい。松陰先生の妹さんだ」

と、久坂は怒ったような口調でいったが、顔は当惑している。

松陰には三つ下の妹千代（のちお芳）があり、この妹をもっとも愛し、野山の獄中からもたえず手紙を送っていた。千代は親戚の児玉家へ嫁き、二児の母になっている。お寿という九つちがいの妹があ

り、この女性も藩の儒者小田村伊之助（のち榎取素彦）にとついでおり、いまは、蔓かごをもっていたお文おふみだけのこっている。

「いいや、妹さんというだけではあるまい」

と、高杉はへんにからんできた。

（こいつ、不良もがりか）

と、久坂は内心驚き、妙な男を村塾につれてきた、と後悔した。

しかし高杉の質問にはすなおに答えた。

「許婚いんまけだ。年があけると早々、娶めとる」

「惚ほれていたのか」

と、高杉はそういう方面の関心がつよく、うるさく纏まとりついた。

久坂は当然ながら不愉快になり、

「君にとってそれがどんな意味があるのだ」

といったが、高杉はへらへらした顔で、

「おれはどうやら好色なたちらしい。すまんが、おれの質問に答えてくれ」

と、立ちどまったまま、かるく頭をさげた。

（妙な男だ）

と、久坂は手こずる思いだったが、頭をさげられた以上、まじめに答えるほかないとおもい、

「惚ほれてはおらん」

と、久坂は小声でいった。

久坂は、齡が嫩いだけに婦人に対する関心が、霧をとおして山河を見るようにぱく然としており、それだけに絵にかいたような美人がすきで、もし娶るならばそういう絵のような美女を娶りたいとおもってきた。ところが数日前、松陰が久坂をよんで、いつも以上に鄭重な態度で、

「久坂君のご意向をうかがいたい。あなたには、僕の義弟になってくれる気はありませんか」というのである。

松陰吉田寅次郎ともしろうというのは、そういうひとであった。かれは久坂玄瑞という門生の人物やら資質やらに、師匠というより友人、同志として傾倒もしくは心酔ということばをつかつていいほどに敬愛するようになっていた。松陰という人物は、心を傾けるともはや身も世もなくなるひとであった。かれがなぜ婦人を愛さなかったかといえば、ひとつには、婦人を愛するとどうなるかわからない自分をひそかに感じ、知っていたからであらう。

ともあれ、松陰は久坂玄瑞という青年を珠玉のようにおもっている。玄瑞をいっそ自分の義弟にしたかった。となると、末妹のお文をかれにやることであった。

そうおもうと、松陰のくせで矢もたてもたまらず、久坂の意向を問うたのである。

久坂は、このときほど師の松陰というひとに当惑したことがない。かれはお文という小娘をよく知っている。

（あんな小娘を）

と、久坂は災害に遭ったような、わが身の不幸をおもった。

しかし、久坂が尊敬するこの塾の先輩に、口羽^{くちは}覚蔵という、いかにも田舎のおやじといった顔つきの人物がいる。以前から松陰の専門（山鹿流兵学）のほうの門人で、松陰が村塾をひらくと、覚蔵も、教師ともつかず世話人ともつかぬかたちで門人たちの世話をやいている。ついでながら口羽覚蔵は、その風貌どおり、維新後この松本村の村長になり、一生を無名でおわった。その口羽覚蔵に相談すると、口羽は、久坂がお文が美人でないためにためらっているのを見て、

「はずかしいとおもわないか」

と、めずらしく怒りをうかべ、君はアレか、色をもって妻をきめるのか、といった。

久坂は憤然としてソウデハアリマセンと言ひ、いった以上あっさり兜をぬぎ、すぐ松陰のもとにまかり出て、妹君をいただきとうございます、と畳にひたいをこすりつけて懇望した。

松陰は声をたてて笑い、無邪気によるこび、さっそく母親のお滝や当のお文につげた。兩人とも異存はなかった。ちなみにこの当時は早婚だが、久坂は両親や兄が死んでしまつてその血統はかれひとりになったため、早く妻をむかえて家系を継続させるという慣習的な義務がこのばあいだったのである。要するにきまつてからまだ数日しか経たず、お文にすれば久坂を見ることが羞^{はづか}しかったのであろう。「そういうことか」

高杉は頬を掻き、急に興味がうせたような顔をした。しかし、松陰という人物を知るうえでは、多少の参考になった。

「あれが、塾だ」

と、久坂がいったのは、敷地の一隅にある物置小屋のような建物だった。

（あれが）

高杉も、さすがにその粗末さにおどろいてしまった。おそらく前身は農具小屋だったにちがいない。その小屋をのぞいてみると、人が十人ばかりいて文章を書いている。

松陰は、いなかった。松陰は禁錮^{きんこ}中の囚人であるため、外出することはなく、この小屋に居なければ、禁錮部屋にいるはずであった。

そこへは、屋敷をぐるりとまわらなければならない。屋敷の裏手に面している。高杉は久坂にとりなわれてゆくと、屋敷の東すみに紙障子^{しじょうし}がはめられていて、三疊半の間がある。そこがこの家の仏壇の間であったが、松陰が罪をえてからは、藩にとり出でかれの禁錮部屋にした。

このせまい開口部にも一縁がある。高杉はなにげなくそこへ腰をおろして、さて顔をあげると、おどろいたことにまるで仏像^{がん}が龕^{がん}におさめられているようななかっこうで、そこに松陰がすわっていた。なかが暗くてわからなかったのである。久坂が、

「立ちたまえ」

と、いった。むろん高杉は悪意があつて腰をおろしたわけではないから、立ちあがつた。

久坂が、高杉の紹介をした。

松陰は、しきりにうなずいていた。やがて高杉がすすみ出て、

——ぜひ入門させていただきとうございます。

というと、松陰ははっきりした言葉で、

「イイデショウ」

と、いった。

久坂からきいていたかれの場合とちがい、入門許可がひどくあっさりしたもので、高杉は張りつめていた力が抜けたように失望した。松陰は自分を買っていないのではないかと思い、自尊心がわずかながら痛んだ。

松陰というのは優しげな男で、わざわざ縁側まで出てきて、すわった。ほそい吊り目で、顔がほそく、眉がピンとはねあがり、頬のあたり薄あばたがある。べつに微笑をうかべているわけでもないのに、顔全体が澄んだ感じで、接しているとひどく気持がいい。

高杉は、自分の詩文集をさしだした。それが、あたらしい学問の師匠につくときのしきたりであった。

松陰はその冊子に顔を伏せ、熱心に読んだ。

たかだか十八歳の年少者の詩文のどこがおもしろいのだろうと高杉自身がききたくなるほどの熱心さだった。

時間が容赦なく経った。

松陰は顔をあげて、

「君は、何時なんときまでここにおれます」と、きいた。

高杉のこっけいさは、このように手綱なしの馬のような男でありながら、祖母が設けている門限時間がかくてそれを懸命にまもっているところであった。祖母は日没後までそとにいてはいけな、と子供のころから高杉をしつけてきている。いまの季節は日がみじかいから、あと一刻ぐらいならいいであろう。高杉はその時間をいった。

松陰はうなずき、ふたたび顔を伏せて高杉の文集を読んだ。

やがて顔をあげ、最初にいったことばは、高杉が終生わすれられぬところであった。

「久坂君のほうが、すぐれています」

と、いうのである。

高杉は、露骨に不服従の色をうかべた。

（おもったとおりだ）

と、松陰はおもった。

人を見る目が異常にすぐれている松陰は、この若者が、裏へまわってここへ入ってきた最初から、尋常でない男がやってきたという感じがした。ふてぶてしいというわけではないが、渾身にもっている異常なものを、ところどころ破れてはいても行儀作法というお仕着せ衣装で包んでいる。それも、やっと包んでいる。

——奇士が、二人になった。

と、松陰はおもった。

「松下村塾の目的は、奇士のくるのを待って、自分（松陰）のわからずやな面を磨くにある」